# マリアの凌辱
## ――『誰がために鐘は鳴る』における性と暴力

高野　泰志

アーネスト・ヘミングウェイ（Ernest Hemingway）の『誰がために鐘は鳴る』（*For Whom the Bell Tolls*）は 1940 年 10 月 21 日に初版 75,000 部で発売され，翌 41 年 4 月 4 日には 491,000 部を売り上げた。43 年までにアメリカだけで 785,000 部を売り上げ，さらにイギリスでも 100,000 部が売れていた。これはアメリカ文学史上『風と共に去りぬ』（*Gone with the Wind*）以来の大ベストセラーであり，批評的にも“the Book-of-the-Month-Club selection”（1940 年），“the Limited Editions Club Gold Medal”（1941 年）を始めとし，1948 年にはエイサ・ドン・ディキンソン（Asa Don Dickinson）の *The Best Books of Our Time* で 1936〜45 年の「最優秀アメリカ小説」に選ばれている[1]。このように発売当初は輝かしい受け入れられ方をした作品であるにもかかわらず，あるいはだからこそというべきかもしれないが，今日のヘミングウェイ研究で本作品に払われる関心は決して高くはない。ヘミングウェイの長編小説の研究書では『日はまた昇る』（*The Sun Also Rises*）に関するものが最も多く出版されており，続いて『武器よさらば』（*A Farewell to Arms*）も比較的論じられているが，ヘミングウェイ作品でもっともよく売れた『誰がために鐘は鳴る』の研究書は今日に至るまでレナ・サンダーソン（Rena Sanderson）の編集した論文集 *Blowing the Bridge* とアレン・ジョゼフス（Allen Josephs）の For Whom the Bell Tolls*: Ernest Hemingway's Undiscovered Country* の 2 冊を見るのみである。

最初期の批評においても『誰がために鐘は鳴る』に対して批判的な見解は既にあった。エドマンド・ウィルソン（Edmund Wilson）はこの作品の書評で，30 年代のスランプから脱したヘミングウェイを賞賛し，「芸術家ヘミングウ

ェイが再び我々とともにいる。まるで旧友が帰ってきたかのようだ」（240）と述べているが，一方で主人公ロバート・ジョーダン（Robert Jordan）とマリア（Maria）の恋愛があまりにもメロドラマ的であることを指摘して，この作品が「まったくハリウッド向きに作られた恋愛物語」（242）であり，さらに「すべてが若者のエロティックな夢想をあまりにも完璧に映し出している。ヘミングウェイの他の作品で見られたような恋愛の真実の差し迫った感情を欠いている」（242）と不満を述べている。1950 年代にヘミングウェイ批評の礎を築いたフィリップ・ヤング（Philip Young）も同様に，この作品が「ヘミングウェイの本の中でもっとも過小評価されたもの」（107）といいながら，マリアの人物描写に関しては「マリアは周囲の状況を考えるとあまりにも非現実的である。信じられないくらい従順で献身的であり，そのために人物としての個性が死んでしまっている」（109）と批判的である。後の『誰がために鐘は鳴る』の批評は，このウィルソンやヤングの意見をそのまま受け継ぐ形で発展していく。誰もが作品の価値を認めながらも，それはヘミングウェイの政治（特に共産主義）への幻滅が現れているからであり[2]，作品自体は構成が緩慢で人物描写は浅薄であるというのがヘミングウェイ批評の常識となってしまったのである。

『誰がために鐘は鳴る』はスペイン市民戦争を舞台にしたゲリラの一団を描く作品である。アメリカの大学でスペイン語講師をするアメリカ人ロバート・ジョーダンは，人民戦線側の攻撃作戦の一環として，ゲリラ団をひきいて橋梁爆破の任務を引き受ける。ジョーダンはパブロ（Pablo）を首領とするゲリラの協力を取り付けるためにグアダラマ山中に向かうが，そこでゲリラに救出された少女マリアに出会う。マリアはファシストにレイプされ，頭を丸刈りにされていた。物語は橋梁爆破にいたる 3 日間と，その間に発展するジョーダンとマリアとの恋愛を描くが,橋の爆破を物語の中心に据えながら，その中心に収斂することなく，パブロの妻でゲリラ団の事実上の実権を握っているピラール（Pilar）の語りやマリアのレイプの語りなど，さまざまな人物の視点からの語りを含めながら拡散し，肥大していく。

実際に映画化されたこともあって，研究者たちは当然のように「ハリウッド向きの作品」として考えているが，はたして主人公のジョーダンはハリウ

ッド映画のヒーローのようにヒロイックな人物として描かれているだろうか。またマリアは本当に男性の望み通りの行動しかしない非現実的な人物であろうか。本論文ではジョーダンとマリアの人物造形を再検討し，ジョーダンが従順な女性を暴力的に支配したいという欲望を持っていることを明らかにする。またジョーダンの欲望を反映する人物としてのマリアは，ジョーダンにとって「非現実的なほど従順」である必要があったのである。物語はマリアへの暴力的な欲望と，マリアをレイプしたファシストへの暴力的な怒りとに捕らわれたジョーダンが自家撞着に陥ったまま終わるのである。

まずはふたりが初めて出会った直後の食事の場面を見てみたい。

> Her [Maria's] legs slanted long and clean from the open cuffs of the trousers as she sat with her hands across her knees and he could see the shape of her small, up-tilted breasts under the gray shirt. Every time Robert Jordan looked at her he could feel a thickness in his throat.
>
> …
>
> They were all eating out of the platter, not speaking, as is the Spanish custom. It was rabbit cooked with onions and green peppers and there were chick peas in the red wine sauce. It was well cooked, the rabbit meat flaked off the bones, and the sauce was delicious. (22-23)

後に初めてふたりがセックスをするときからジョーダンはマリアのことを「ウサギ」というあだ名で呼び始めることを考えると，上の引用は非常に重要な意味を持つ。ジョーダンが何より注意をひかれているのはマリアのむき出しになった脚であり，その肉体を横目にしながらウサギの肉を味わっているのである。このときマリアはジョーダンの中で欲望の対象と化しており，ジョーダンがこの日の夜にマリアの肉を味わうことになることを予示しているのである。

アレン・ジョゼフスは「ウサギ」という言葉（conejo）がスペイン語では女性性器を意味する極めて卑猥な言葉であることを指摘し，レイプされた女性に対するあだ名としては不適切であることから，ヘミングウェイのスペイ

ン語の知識が乏しかったことを指摘している（“Hemingway’s Poor Spanish” 211-15）。しかしヘミングウェイは作品中で使われたスペイン語に関してはスペイン人グスタボ・デュラン（Gustavo Duran）にネイティブチェックを依頼しており，デュランであれば“conejo”が卑猥な言葉であることに気づいたはずである。あるいはこの言葉はジョーダンのマリアに対する欲望を指し示すために故意に使用された可能性もある。

マリアがヤングの言うように「信じられないくらい従順で献身的」であったのは，それがマリアにとって唯一の生き残るための手段であったからに他ならない。そもそもファシストの欲望の対象としてレイプされ，ゲリラに救出された後はレズビアンのピラールの欲望の対象として，ピラールからジョーダンに譲り渡された後はジョーダンの欲望の対象として，マリアは他者の欲望を受け入れることで生き残ってきた。いわばマリアは他者の欲望を映し出す鏡なのであり，その意味でエドマンド・ウィルソンがマリアを「若者のエロティックな夢想をあまりにも完璧に映し出している」（242）と批判したのは，ウィルソンの意図とは別の意味でマリアの本質を言い当てている。

ジョーダンとマリアのセックスの場面もまた，しばしばメロドラマ的であると批判されてきた。二人がセックスをするとき，ジョーダンは「大地が動く」のを感じる。

> …now beyond all bearing up, up, up and into nowhere, suddenly, scaldingly, holdingly all nowhere gone and time absolutely still and they were both there, time having stopped and he felt the earth move out and away from under them. (159)

ジョーダンが性的絶頂に向かうにしたがって文章そのものが高揚していくのがよく分かる。しかしこの後も作品中で何度か現れる「大地が動く」という表現は，あまりにも通俗的である。しかし一見ふたりの性的高揚をドラマチックに描いているようだが，この直後のふたりの会話を読むと，上の引用の高揚感はあくまでジョーダンの視点から描かれたものにすぎず，マリアは必ずしも同じようには感じていなかったらしいことが分かる。

> "…I feel as though I wanted to die when I am loving thee."
> "Oh," she said.　"I die each time.　Do you not die?"
> "No.　Almost.　But did thee feel the earth move?"
> "Yes.　As I died.　Put thy arm around me, please."
> "No.　I have thy hand.　Thy hand is enough." (160)

ここで特徴的なのは，マリアがジョーダンの言葉に対してすべて迎合するように肯定的に答えているのに対して，ジョーダンの応答はすべて否定であることである。この部分を読む限り，ふたりの感じているものの間には明らかに距離がある。そしてその感覚の相違がふたりの間でうまく伝わっていないのである。これはヘミングウェイ作品に非常に頻繁に見られる男女間のミスコミュニケーションのモチーフの典型例と考えられるだろう。そして否定するジョーダンとそれに応じようと試みるマリアという図式からは，マリアがジョーダンの欲望の対象であり，ジョーダンがマリアの自発的意志を抑圧しようとしていることが読み取れる。

ジョーダンがマリアを欲望の対象と捉えていることはこれ以後も作品中に何度も繰り返しほのめかされている[3]。そしてさらに重要な点は，表向きマリアの保護者として振舞いながらも，ファシストにレイプされて頭を丸刈りにされたマリアの傷に対してジョーダンがきわめて鈍感であることである。マリアと歩きながら思考をめぐらす中で，ジョーダンは急にマリアと結婚してもかまわないと思いつく。

> Spanish girls make wonderful wives.　I've never had one so I know. And when I get my job back at the university she can be an instructor's wife and when undergraduates who take Spanish IV come in to smoke pipes in the evening and have those so valuable informal discussions about Quevedo, Lope de Vega, Galdós and the other always admirable dead, Maria can tell them about how some of the blue-shirted crusaders for the true faith sat on her head while others twisted her arms and pulled

her skirts up and stuffed them in her mouth. (164-65)

ゲリラの一団に救出された後，マリアは長い間口をきくことができなかったという。これは自分の受けた体験を語ることがどれほど大きな精神的衝撃になるかを物語っている。ジョーダンはそのマリアの受けたレイプの場面を空想の中で常套的なレイプ場面として再構成し，それを当然のことのように自分の学生に語らせようと考えているのである。

作品後半にはマリアがジョーダンの欲望の対象であることを拒む場面が描かれている。橋を爆破する前夜，ジョーダンはマリアと一夜を過ごすが，マリアが痛みを感じたためにセックスをすることができないのである。以下はその直後の場面である。

> “Oh, Roberto, I am sorry I have failed thee. Is there not some other thing that I can do for thee?”
>
> He stroked her head and kissed her and then lay close and relaxed beside her, listening to the quiet of the night.
>
> “Thou canst talk with me of Madrid,” he said and thought: I’ll keep any oversupply of that for tomorrow. I’ll need all of that there is tomorrow. There are no pine needles that need that now as I will need it tomorrow. Who was it cast his seed upon the ground in the Bible? Onan. How did Onan turn out? He thought. I don’t remember ever hearing any more about Onan. He smiled in the dark. (342)

ここでジョーダンは，射精の手助けをしようというマリアの提案を断ってオナニズムの語源になった聖書の中の人物，オナンに思いをめぐらせている。まずここで気づかなければならないのは，ジョーダンが力の源である精液を保存すべきものと捉えている点である。この考え方は 19 世紀以来のアメリカに特徴的なマスターベーション観である。ディヴィッド・M・フリードマン（David M. Friedman）は以下のように述べている。

> Nowhere was this new “semen science” better received than in the United States. Masturbation phobia and the belief in spermatorrhea were in perfect pitch with a young culture based on mercantilism, machines, misogyny, and the belief that anything can be measured or made more efficient. America’s secular religion, capitalism, rewarded constructive investments and penalized foolish ones, a metaphor that extended into sex. A then common usage referred to any ejaculation as something “spent.” Masturbation offered no return and was therefore condemned as wasteful. (Friedman 91)

アメリカの資本主義的価値観にとってマスターベーションは害悪でしかなかった。精液はより有効活用できる機会のために保存されなければならず，無駄に消費すべきものではないのである。そういう意味でジョーダンは典型的なピューリタニズムの価値観で性を捉えていると言えるだろう。またジョーダンが覚えていないと言っているオナンのその後であるが，オナンは精液を大地に蒔いた後，神の怒りを受けて打ち殺されるのである。あえて「覚えていない」と発言させることでオナンの末路に注意を喚起していると考えれば，ここでマスターベーションと「罪」とが強く結びつけられていることは明らかである。

ヘミングウェイはこれ以前の作品で，自分の生まれ育ったピューリタニズムの価値観を攻撃することに腐心していた[4]。たとえば初期の短編「エリオット夫妻」（“Mr. and Mrs. Elliot”）では，主人公ヒューバート・エリオット（Hubert Elliot）は，セックスを子どもを生むためのものと考える人物であるが，物語はそのようなヒューバートを執拗にあざけっている。にもかかわらずこの作品で突如，主人公にその同じ価値観を代弁させているのは一見奇妙に思える。他の作品で見られるヘミングウェイのピューリタニズム観を考慮に入れるかぎり，このジョーダンという人物を作者ヘミングウェイを投影した人物として読むわけにはいかない。むしろ批判的に相対化された人物と考えるべきだろう。

これまでジョーダンをヘミングウェイと同一視する解釈が頻繁になされて

きたが，これまでも述べたようにジョーダンはそれほど同情的には描かれていない。ジョーダンは一見マリアを守るヒロイックな人物であるが，レイプをめぐるヘミングウェイの描写を綿密に見る限り，そのような見方には再考の余地があるはずである。スーザン・グリフィン（Susan Griffin）はレイプを研究した著書で「騎士道の基本は，男が女を，男の手から守ることにある。（中略）早い話，騎士道とはレイプの存在を前提に成り立つ，昔ながらのゆすり行為にほかならないのだ」（32）と述べているが，そういう意味で女性を「家庭の天使」として，男に守られるべき存在と扱っていたピューリタニズムの価値観は，レイプという暴力の上に成り立っていた。そしてジョーダンのマリアに対する態度は暴力的世界からか弱い女性を暴力的に守るという点で，ピューリタニズム的家父長制の典型であり，マリアを守るジョーダンの「男らしさ」はレイプを含んだ暴力が存在することを前提としているのである。

　またヘミングウェイはジョーダンがマリアを性的対象としてモノ化していることを意図的に描き出してもいる。マリアはファシストにレイプされた女性であり，上の場面で痛みを感じてセックスができないのは，そのファシストの暴行が原因であると説明している。にもかかわらず，ジョーダンはマリアの身体を気遣いながらもセックスできないことを「最後の夜だというのについていない」（341）と考える。マリアの痛々しいレイプ・ナラティブはこのセックス失敗の直後に置かれていが，ここからもヘミングウェイがジョーダンの性欲とレイプとを関連づけようとしているのは明らかである。そしてジョーダンはそのマリアの語りを抑圧しようとする。「話さないでくれ」「もう話さないでくれ」「これ以上はなさないでくれ」「そのこと話さないでおこう」（350-53）と，マリアの語りを遮ろうとしているが，ジョーダンのこれらの言葉には，たんに愛する女性の痛々しい語りを聞いていられないから，というよりはむしろ，マリアの体験を自分の学生に語らせようとしていたときに念頭に置いていたような常套的なレイプ場面に回収しようとしているように見える。

　またパブロが爆薬の起爆装置を持って逃亡したことを発見した後，その激しい怒りを徐々に鎮めながら「愛してもいない女と性行為を行った後のよう

な」気分になり，眠っているマリアに向かって「ちょっと前にきみが何か話していればきっと殴りつけていただろう」（370）と話しかける。そのしばらく後で，結局目覚めたマリアとジョーダンはセックスをすることになる。

> “Oh, Maria, I love thee and I thank thee for this.”
>
> Maria said, “Do not speak.　It is better if we do not speak.”
>
> “I must tell thee for it is a great thing.”
>
> “Nay.”
>
> “Rabbit —”
>
> But she held him tight and turned her head away and he asked softly, “Is it pain, rabbit?”
>
> “Nay,” she said.　“It is that I am thankful too to have been another time in *la gloria*.”　(379)

セックスをしたばかりで興奮しているジョーダンとは対照的に，マリアは話すことを拒み，ジョーダンから顔をそむけている。おそらくは痛みを感じているマリアとジョーダンとがセックスをしていることから明らかになるのは，ヘミングウェイがジョーダンをファシストのレイピストたちと同一視させようとしていることである。結局のところ，ジョーダンの行った行為は，行為としてはファシストのレイプと同じものであり，男性の性欲の持つ暴力性をむき出しにしているのである。ジョーダンという登場人物において，暴力とエロスは完全に結合している。

『誰がために鐘は鳴る』は，語り手が物語の大半をジョーダンの視点から語っているために，不注意に読むとジョーダンが作者の価値観を体現した人物として考えてしまいがちであるが，マリアとの関わりを注意深く見てみる限り，作者は慎重にジョーダンから距離をおいている。自らの欲望を一方的にマリアに押しつけるジョーダンは，最初からマリアをレイプしていたのであり，それが橋の爆破前夜に実際にファシストのレイプと重ね合わされて描かれる。橋を爆破するという暴力的な任務を負って作品に登場し，なおかつマリアに向けた愛情がマリアをレイプしたファシストと同様に暴力的でしか

ありえないという状況に追い込まれ，ジョーダンは男性性の持つ避け得ない暴力性に捕らわれているのである。そして物語の結末でジョーダンは脚を負傷し，どこにも動けないまま暴力性に捕らわれて死を待つのである。

## Notes

＊本稿は平成 19 年度九英会総会（平成 20 年 2 月 23 日）において行った口頭発表に加筆・修正を施したものである。

[1] Sanderson 4.

[2] **研究者たちはヘミングウェイが 1930 年代に傾倒していた共産主義と袂を分かち，以後は政治的に無関心であったということを主張するために『誰がために鐘は鳴る』を利用してきた。左翼批評家のケアリ・ネルソンはこのような解釈を強く批判している。**Nelson 36 **を参照。**

[3] **たとえばマリアを娼婦と比較している箇所など**（166）。

[4] **ピューリタニズム的価値観から逃げ出したかったヘミングウェイは，2 度目の結婚の際にカトリックに改宗しているが，そのカトリックがスペイン市民戦争の時にフランコを公式に支援したために，ヘミングウェイはカトリックにもまた激しい不信の念を抱いていた。**

## Works Cited


Friedman, David M. *A Mind of Its Own: A Cultural History of the Penis*. NY: Penguin, 2003.

スーザン・グリフィン『性の神話を超えて―― 脱レイプ社会の論理』幾島幸子訳（講談社，1995 年）

Hemingway, Ernest. *For Whom the Bell Tolls*. 1940. NY: Scribner's, 1995.

Josephs, F. Allen. "Hemingway's Poor Spanish: Chauvinism and Loss of Credibility in *For Whom the Bell Tolls*." *Hemingway: A Revaluation*. Ed. Donald R. Noble. Troy: Whitston, 1983. 205-23.

———. For Whom the Bell Tolls*: Ernest Hemingway's Undiscovered Country*. NY: Twayne, 1994.

Nelson, Cary. "Hemingway, the American Left, and the Soviet Union: Some Forgotten Episodes." *The Hemingway Review* 14.1 (1994): 36-45.

Sanderson, Rena. "Introduction." *Blowing the Bridge: Essays on Hemingway and* For Whom the Bell Tolls. Ed. Rena Sanderson. NY: Greenwood, 1992. 1-17.

Wilson, Edmund. "Return of Ernest Hemingway." *Ernest Hemingway: The Critical*

*Reception*. Ed. Robert O. Stephens. NY: Franklin, 1977. 240-43.

Young, Philip. *Ernest Hemingway: A Reconsideration*. University Park: Pennsylvania State UP, 1966.